

佛蘭西書巡覧 2

平山 弓月

ヨーロッパはアジアの関心を引きつけ始めているので、ついにはアジアをヨーロッパの姿に似せて作り上げてしまうだろう。

L'Illustration, 1867-4-27

前回に引き続き、もう一度挿絵入り新聞 *L'Illustration* についてお話ししましょう。

それ以前から日本の近海には、イギリス、アメリカ、ロシアの船舶が姿を現していましたが、19世紀も半ばに入ると、欧米諸国の東アジアへの関心は顕在化してきました。アメリカのペリー提督が、いわゆる「黒船」を率いて江戸湾に侵入し、武力行使をもにおわせながら江戸幕府に開国を迫ったのは1853年（嘉永六年）のことでした。その後、江戸幕府は欧米各国と、次々に条約（不平等なものでしたが）を結ぶこととなるのは皆さんの熟知しているところでしょう。

こういう情勢のなか、日本がフランスと公式の外交関係を持つにいたったのは、1858年（安政五年）の日仏修好通商条約締結以降であり、来年はちょうど150周年の記念の年を迎えます。

その約10年前の1847年に日本関係の記事を掲載したのを嚆矢とし、*L'Illustration* 紙はその後、日本に関する情報を、回数的にも量的にも増やしてゆきました。いくつか例を挙げてみましょう。

外国の耳目を集める大きな出来事といえば、やはり戦争でしょう。日本は1894年（明治二十七年）に清国と戦います。この戦いで日本は勝利を収めるのですが、*L'Illustration* 紙はこの戦争に関連して、過去に日本へ派遣された三つのフランス軍顧問団の役割を詳しく述べています。あたかも、日本がいち早くヨーロッパ流の軍隊を整備していたから、旧弊な組織しか持たない清国に勝てたのだと理解しているようです。後進国だとみなしていた日本が、自分たちと同じ列強国の仲間入りをしようだという予測に違和感を抱いているようです。

透徹した精神を駆使し世界を考察したヨーロッパ人、ポール・ヴァレリイ *Paul Valéry (1871-1945)* ですら、あの膨大な『カイエ』の1894年のノオトに、「日本人の問題」と書き付けたのは、ヨーロッパ中心の世界像が崩れ始める予感を持ったからではなかったでしょうか。

当初の記事は、このような戦争や政治的な内容のものが大半でしたが、ジャポニスム *Japonisme* の高まりと軌を一にするように、徐々に文化、風俗習慣、美術芸術を紹介する記事が紙面に見られるようになります。記事に添えられた図版も、初めの頃の中国風の奇妙なものから、はっきりと日本を感じさせるものへと変わってゆきます。

それには、直接日本の地を踏んだ幾人かのフランス人の描いた日本や、1867年（慶応三年）、1878年（明治十一年）、1900年（明治三十三年）のパリ万国博覧会で展示された多くの文物や、徳川昭武ら参加した多様な人々の姿が寄与したと思われます。

掲載されている記事や図版を丁寧に見てゆくと、フランスが日本に寄せる関心のありどころが見えてきます。浮世絵をはじめとする、日本美術や意匠、盆栽、着物、宗教などなど、今の日本人が忘れてしまったようなものまでフランスの目はとらえていたのです。19世紀末にフランスで上演された、日本風演劇、日本風バレエの記事は、日仏文化交流史を考えるうえで、貴重な資料となるに違いありません。

ひらやま ゆづき（教授・フランス語・フランス文化論）

